

編集後記

2020年の世界や社会は、コロナ禍によって人々の生活様式が根底から変化を求められました。長期間の感染拡大を防ぐため、飛沫感染や接触感染、近距離での会話など、三密回避やマスク着用といった対策を講じ、日常生活に定着させ持続させる「新しい生活様式」です。冬のインフルエンザが流行するシーズンだけでなく、春夏秋も外出時や会話時にはマスクを着用する光景が「習い性と成る」(『書経』太甲上)で、当たり前な世の中となりました。

マスクの定義を調べると、「天然繊維・化学繊維の織編物または不織布を主な本体材料として、口と鼻を覆う形状で、花粉、ホコリなどの粒子が体内に侵入するのを抑制、また、かぜなどの咳やくしゃみの飛沫の飛散を抑制することを目的に使用される、薬事法に該当しない衛生用製品」(一般社団法人日本衛生材料工業連合会HP)とありますが、「口と鼻を覆う」ことでウイルスの侵入を予防できる反面、顔面表情筋の多くが集まる口元を含んだ顔の下半分が隠れてしまいます。

対面のコミュニケーションでは、口元の表情が見えないと相手の心理を読み取れず、不安になります。「目は口ほどにものを言う」という諺がありますが、「口は物を食べる、会話をするということにも使われますが、目とともに表情を作るのに重要なパーツです。(中略)口元は、強いストレスがかかっていたり、喜びにあふれていたりとといったような、今のその人の状態を表すだけでなく、その人、そのものの性質をも表します。」との指摘もあります(佐藤親次氏 養下成子氏 『読顔力 コミュニケーション・プロフィールの作り方』小学館 101新書 2009年12月)。口は、呼吸・飲食・会話の三機能にプラスαの部位です。

発生生物学的には、腸管の発生に伴う摂取と排泄の機能を担う口の方が目よりも先です。人類は意思疎通の手段として言語を獲得しましたが、言葉が発せられるのも口です。日本語の慣用句で「言葉にして話す」ことを「口に出す」、激しい議論の様子を「口角泡を飛ばす」等と表現します。マスク越しでも声は届きますが、口元の表情までは読み取れません。教室に集う仲間たちに目元だけでなく、口元にも「口角を上げた笑顔」が戻ることを祈ります。

今号は、こども学科6件、スポーツ学科3件、短期大学部1件、合計10件の投稿がありました。どうぞ高覧ご批正くださいますよう、宜しく願い申し上げます。

2021年3月吉日

編集委員長

馬場 治

《投稿された論文等に関する著作権は基本的に人間科学部に帰属します》

「金沢星稜大学学会 会則と規程等」については下記WEBサイトの閲覧をお願い致します。

<http://www.seiryu-u.ac.jp/u/education/gakkai/research02.html>